

水の源

2014.6
25

M I Z U N O M I N A M O T O

巻頭インタビュー 水源の里へ思いを馳せる

わたしの原風景は 山間の集落にあります

京都大学大学院農学研究科・教授 新山 陽子さん

ウォークルポ

お寺を舞台に地域おこし
癒しのまち

島根県 松江市

若葉のふるさと協力隊

冬の山里にあかりを灯す

京都府 綾部市 奥上林地区

水源の里ノート

奇祭「すみつけ祭り」と
権現窯の復活

大分県佐伯市宇目 木浦鉦山集落

水源の里のうまいもん

ふたなそるべ

高知県中土佐町



水源の里へ思いを馳せる

聞き手：『水の源』編集長 町井 且昌
京都大学農学部総合館にて

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」。
「水源の里」の理念は、双方の地域に住む人たちがお互いの暮らしや環境への理解や感謝が通い合っ
てこそ実現します。このコーナーでは文化人・著名人に、そうした「水源の里」にまつわるお話をうかが
います。

わたしの原風景は 山間の集落にあります

京都大学大学院農学研究科・教授 新山 陽子さん

田んぼも小川も遊び場

— 先生、ご出身は。

生まれは広島県千代田町というところで、今は合併して北広島町になっています。島根県との県境の山間部、日本海に注ぐ江の川の最上流にあります。私が子どものころは、川にはウナギがいましたし、アユも上って来ました。オオサンショウウオもいて、本当に美しいところでした。四歳くらいのときに祖父母以下一家全員で京都に出てきましたが、田舎の記憶はものすごく鮮明に残っています。私の原風景は生まれ育った家とその周辺です。母の実家は今も広島にありますし、親戚も広島に多いので、大学生のころまでは夏休みによく帰っていました。

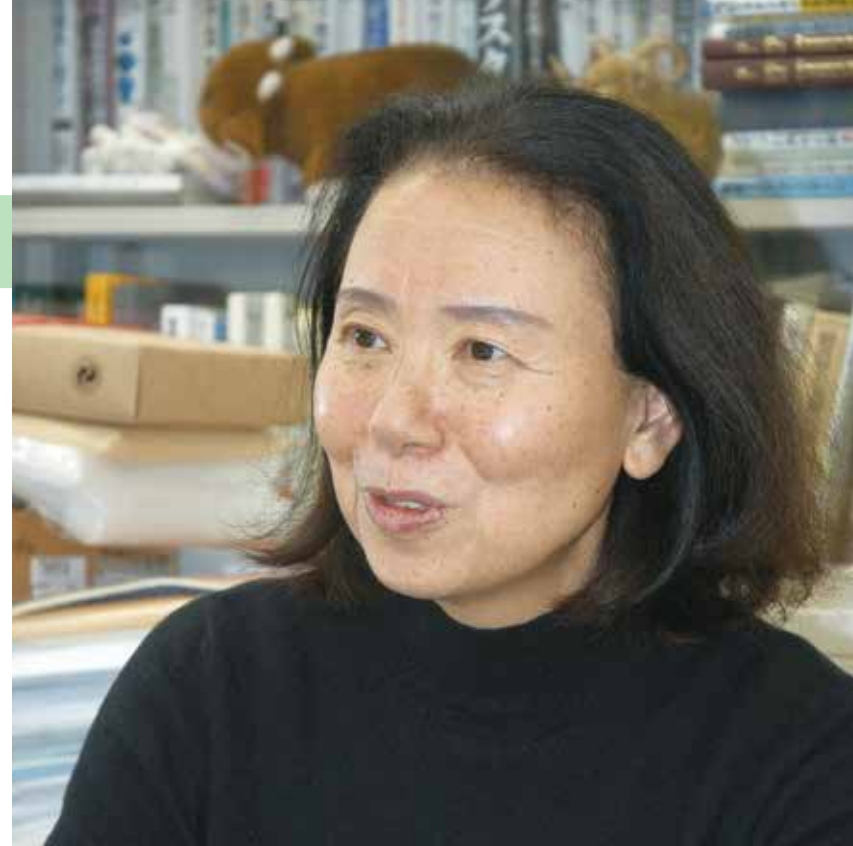
— 先生はそこでどのような思い出が？

木に登って柿を採りました。田んぼも小川も遊び場でしたね。夏に小川に入り、ザルで魚を追っ込んで、ピチピチ跳ねた魚のお腹が銀色に光っていたことを覚えています。ホタルの乱舞も見られました。箒でホタルを採って、ネギの中に入れる



とポーッと光るんです。秋は稲を乾かす稲架を鉄棒がわりにして遊びました。私の子ども時代はそこで育ちましたし、モチベーションの根源はそこにあります。

悲しいことに、今はどこにも美しい農村風景がありません。排水路はあっても小川はない。農村に住んでいても自然と触れ合っ
て楽しめる場所がないんですね。



Profile

京都大学大学院農学研究科教授。京都大学農学研究科博士課程修了、同農学部助手、助教授を経て現職。畜産の企業形態、牛肉フードシステムの日欧米比較、食品安全などが主な研究テーマ。最近では、認知科学を導入し、消費者の食品選択行動、食品リスク認知の国際比較、食品事業者倫理・プロフェッションの研究を進めている。主な著作に、『畜産の企業形態と経営管理（日本経済評論社）』、『牛肉のフードシステム—欧米と日本の比較分析—（日本経済評論社）』などがある。

日本の農業は過保護？

— 先生のご専門は。

ももとは農業経営学ですが、今は看板を「農業食料組織経営学」に変え、研究領域が広がりました。生産の段階から食品として加工され、流通し、消費者に届くまでの全体のシステムを研究しています。私の主な研究対象も牛肉供給システムから、食品安全などに広がっています。例えば、ある食品について専門家が科学的データによってリスクを評価しても、消費者は直感的にリスクが高いと考えて避ける場合があります。この認識のズレを埋めるためにどんなコミュニケーションが必要か、というようなことを研究しています。

— 農学部も時代とともに変わってきたんでしょうね。

30年程前は、農作物や家畜の品種改良、どんな餌に肥育効果があるかといった、作物が栽培されたり、家畜が飼育されたりする生産現場のことが研究対象でした。それが徐々に、どういう食品を作ったらいいかという領域に広がっていきました。

生物の仕組みを遺伝子レベルまで踏み込んで解明するようになり、理学部や医学部に近いような先端科学の成果を挙げるようになっていきました。

私たちの分野で言うと、農地の制度や農家の経営など、生産現場の研究が中心でしたが、フードシステム全体がどうなっているかとか、消費者が何を考えて行動しているかという面が重要になっています。さらに、環境問題を考えたり、海外の農業を支援したりすることも研究の範囲となっています。農学部という組織の名前は変わっていませんが、研究室の看板は食料、生命、環境の三つがキーワードになっています。

— 農業の分野では TPP も大きな話題だと思いますが、どのようにお考えですか。

環太平洋で経済連携協定を結ぼうということですが、関税だけの話ではなく、相手国の制度に口出しできるということが問題だと思います。医療や保険など、現在の日本の仕組みを維持できるのかという点が懸念事項ですね。医療の分野でも農業の分野でも、日本の立ち位置をどう確保するかが大事なことだと思います。

——「日本の農業は過保護だから強くなれない」という考えもありますね。

日本の農業が過保護という考えは間違いで、アメリカやEUはもっと手厚い保護をしています。アメリカでは国が「目標価格」という経営を存続できる農作物の価格を割り出し、販売価格との差額を補填しています。アメリカの農業規模は日本と比べものにならないほど、とてつもなく大きいですが、農家が所得を維持できる制度になっています。所得の半分は補助金ではないかといわれています。EUの畜産も所得の半分は補助金だと聞いています。

日本は所得に対する直接的な補助制度が非常に不十分で、適切な効率でやっていっても農業だけで食べていけるようにはなっていません。アメリカやEUは専業農家でやっていけるようになっていいる。食料は国家にとって大事なものなので、自立経営ができるように補償しているわけですね。



京のこめ育ち牛

—— 限界集落に関わられたことはありますか？

これまで、直接的な関わりはありませんでしたが、「京のこめ育ち牛」の取り組みは、水源の里とつなぐこともできると思います。

—— お米で牛を育てる取り組みですね。

京都府の畜産センターの企画研究で、飼料用のお米で肉牛を育てるというものです。牛は、「モリタ屋」という京都の有名なすき焼き屋さんの直営牧場（京丹波町升谷）で飼育されています。私はお米で育てた牛を商品として販売するにあたり、消費者に受け入れてもらえるかどうかを調査しています。

—— 餌料用のお米というのは、特別なものなのですか。

普通のお米も使いますが、食用に比べて、収量が多くとれるように品種改良をしたお米があります。牛は最初の8か月くらいが子牛の時期で、その後が肉用に育てる肥育の過程です。京のこめ育ち牛は、この肥育期間にお米を食べて育ちます。京都の牛は肥育期間が24か月くらいと長いのですが、まだ作付面積が少ないので、全部の期間食べさせるまでっていません。

今はお米の消費が減り、先祖代々営々として築いてきた水田が使われなくなっています。とてももったいないことです。その一方で、牛の餌のほとんどを海外からの輸入に頼っている。使われていない水田で餌料用のお米を作ること、食料自給率を上げることができる。水田が活きることで、農村景観の維持にも役立つ。水田に水を溜めることで、水源涵養もできると思います。

また、水源の里で栽培されたお米を特別なものとして消費者に受け止めてもらって、普通のお米より少し高く購入してもらえないか。その売上げを水源の里を守るために使えないか、ということも考えています。

住んでいる人たちが主人公

—— 限界集落へいらっしゃったことはありますか。

ええ、何度もうかがっています。綾部の水源の里集落のうち、古屋、市志は何回も行きました。あと、老富おいとみにも。学生が卒業するまでに、農業の現場と合わせて限界集落というものを知ってほしいと思います、実習で訪ねたんです。

—— 限界集落のこれからについて、先生のお考えを聞かせてください。

そこに住んでいる人たちがどう考えておられるかが大事だと思います。たとえ残り三軒になっても集落の歴史があります。自分の生まれたところであり、先祖も住んでいたところ。そこに住み続けたいという気持ちがあるなら、尊重すべきだと思います。



よく「山が降りてくる」という言い方をします。日本の自然は荒々しくて、ほっといい自然ではありません。荒れるにまかせるのではなく、知恵を集め、少ない資源や予算の中で管理する方法を考えることが必要です。そのためにも撤退すべきでないと思います。

—— 考えるのは地元の人で、こうあるべしと押しつけるのは論外ですね。

その通りですね。政府が言うから、偉い人が言うからとかでやるとうまくいきません。関係者が集まって喧々諤々議論して、それこそ凄い衝突があってもいい。何とかしたいと思って議論するわけですから、そのうちに収れんしてきます。その過程を経てから始めると強くて、後になってもゆるぎません。あくまでそこにいる人たちが主人公です。外から押しつけることではありません。

とは言っても、そこにいる人たちだけで切り開くのは難しいでしょうから、外の人も入って色々な意見を出し合っていくなかで、地元の意見も見えてくるのではないのでしょうか。

地域を元気にする、水源の里の取り組みをレポート



お寺を舞台に地域おこし 癒しのまち

まつえ
島根県 松江市

取材・文：白波瀬 聡美

お寺×地域振興

天気予報は「曇りのち雨」。それでも京都を出る時は、花曇りの切れ間から時折光が射していた。やっぱり「晴れ女」の自称は伊達じゃないなと思いがら、中国自動車道を一路取材先の島根県松江市へ。今回は「お寺を活用した地域振興」がテーマだ。

お寺というと「敷居が高い、堅苦しい」などのイメージがあり、正直なところ、どこか縁遠い気がしていた。しかし、全国にある寺院は7万7千軒と言われ、その数はコンビニを上回る。実は私たちの身近な存在なのだ。

松江市は、中世からの歴史が色濃く残る街で、由緒ある寺院が数多く現存している。そこを舞台に、観光客を誘致する取り組みが注目を集めている。



松江で最も城下町らしい佇まいを残す塩見縄手通り



超宗派・神仏混合 宗教家ミーティング

若手僧侶のおもてなしを、松江観光の新しい目玉に——と、昨年末からスタートした「松江お坊さんカフェ」。松江旅館ホテル組合と市内の僧侶有志によるコラボイベントで、宗派を超えた松江の若手僧侶がホスト役となり、観光客をおもてなしするというもの。事業の話をつたったのは、順光寺若院・籠純吾さん。お寺を地域コミュニティの拠点とすべく奮闘しているお坊さんだ。

ナビを頼りに「順光寺」を訪ねるが、目的地と思わしき場所には「光徳寺」の文字。あれ？ おかしい。場所は確かにこのあたりなのに。慌てて籠さんに連絡を取ると「あ～それ、お隣さんです(笑)」との返事。言われた方角を振り返ると、すぐそこに写真で見た順光寺の建物が……いやはやそれだけ松江には、お寺が多いのである。初対面から少々バツの悪い苦笑いを浮かべる記者を、「遠くからようこそお越しくございました」と快活な笑顔で出迎えてくれた籠さん。

早速、「お坊さんカフェ」開催の経緯を尋ねる。「数年前から神仏混合・超宗派の同世代宗教家が定期的に集まって、それぞれが抱える課題を共有する宗教家ミーティングをやっていたんです。そこから派生した企画で……」神仏混合・超宗派の宗教家ミーティング？ なんだか物々しい言葉が飛び出した。記者の怪訝な面持ちを察したように、「超宗派ってなんか大げさでしょ？ 要は宗教・宗派を超えてという意味で、浄土真宗の私や日蓮宗や曹洞宗などの僧侶、神社の巫女さん、キリスト教の牧師さんなんか



熊野大社

松江神社



←僧侶との和やかな会話に心癒される
↓カフェに来ると座禅や写経などの体験もできる

が集まって、ミーティングと言う名の座談会をします。高齢化や人が集まらないなどの課題は、宗教は違えど共通しているのだから」とさりと言葉を継ぐ。特に信教がなく、宗教というものにどこか「唯我独尊」的要素があるように思っていたので、宗教家ミーティングの話には驚かされた。神社仏閣の多い松江ならではのなせる技なのだろうか……若き宗教家たちの柔軟な発想と懐の深さに感銘を受けた。

ホストは「お坊さん」!?

そんな超宗派の繋がり、松江旅館ホテル組合に加盟する「大橋館」の若女将・石飛順子さんが協力して企画立案された「お坊さんカフェ」。昨年、出雲大社の大遷宮ブームで、松江市の観光客数は初めて1千万人を超えた。しかし、宿泊地・温泉地としては、美肌の湯で知られる「玉造温泉」が人気で、市中心部の「松江しんじ湖温泉」などは、やや押され気味という。

水源の里では、往々にして人里離れた地域での過疎問題が多いが、松江では集客がドーナツ化している珍しい形態。お坊さんカフェは、市内の旅館ホテル組合の「追い風に乗ってもっと中心部に観光客を呼び込みたい」という思いと、「神社のみならず寺の魅力も知ってもらいたい」という僧侶らの思いとが相まって実現にいたった。

おもてなし担当は、宗派の異なる市内の僧侶3人。松江歴史館を会場に、まずは約30分の座禅で心身をリラックスさせた後、煎茶とお菓子を味わいながら僧侶とのフリートークを楽しむ。お茶菓子は松江

の既製お土産品。気に入ったら買って帰ってもらおうという算段だ。来場者は円卓を囲み、修行や袈裟のデザイン、各宗派の作法の違いから、休日の過ごし方などの質問をしたり、自身のちょっとした悩みを聞いてもらったり……普段接することの少ない僧侶と過ごすひときは、新鮮かつ心安らぐと女性を中心に人気を集めている。

「近年、首都圏の女性を中心に、お寺や仏教に興味を持ち、「お坊さんバー」や写経などを一種のセラピー（癒し行為）にとらえるムーブメントが見られます。観光ターゲットの主力が女性である松江市こそ、この流れをうまく受け止め、定期的にお坊さんカフェを開くことで、観光の契機に繋がれば」と籠さんは言う。お坊さんが「ホスト」役となるカフェは、心の癒しを求める現代女性のニーズにマッチしているのかも知れない。

青年会議と寺マルシェ

籠さんにインタビューしていると、ほどなく3人の来客が。今回の取材のために集まってくれた「松江市青年会議」のメンバーだ。松江市青年会議とは、市のまちづくりについて若者の視点で調査研究し提言を行うとともに、自主的な実践活動を行うことを目的として、平成23年度に松江市が設置した組織。

青年会議のメンバー（左、中央左）
順光寺若院・籠純吾さん（中央右）、
青年会議会長の池田俊貴さん（右）



お寺を核とした
まちづくりの第一歩
寺マルシェ



様々な職業、団体から集まった29人で構成されている。その青年会議の25年度の実施事業が「寺マルシェ」。

マルシェとは、フランス語で「市場」の意。お寺を会場に、地元5商店の出店をはじめ、書道や紙芝居などのアートパフォーマンスやワークショップ、子ども縁日などを盛り込んだイベントには、地元住民を中心に450人の来場があり、さながら「市場」のように活気ある催しとなった。会場となったお寺はここ順光寺。瀧さんのお寺を核としたまちづくりの取り組みを知り、寺マルシェ企画にも一役買ってもらったと言う。青年会議会長の池田俊貴さんは「地域の人々にも、身近にある神社仏閣をもっと親しんで利用してもらい、地域を活性化させたいと考えた企画。今回の実施を足掛かりに、地域の人々と松江を訪れる人が交流できる機会にステップアップしていきたい。開催場所も市内の色々な神社仏閣を巡れたら……」と、今後の展望を語る。

この他にも順光寺では、コンサートやヨガ、落語会などといった独自の催しを定期開催しているというが、そもそもお寺にタブーはないのか？ 檀家さんたちはどう感じているのか？ 素朴な疑問をぶつけてみた。「門徒さんたちは“新聞見たよ〜”とか“またおもしろいことしようねえ〜”などと声を掛けて

くれ、好意的に見守ってくれています。古来からお寺は、地域の人が集まるコミュニティセンターの役割を果たしてきたところ。人が集うためのイベントにタブーはありません」と微笑む瀧さんは、SNS^{*}も積極的に活用し、お寺やイベントの紹介などに努めている。今や情報発信に欠かせないSNSだが、活用は「一方通行」でなく「相互交流」を心がけることが大切だという。「SNSはあくまでも、人と人との“ご縁”への架け橋だと考えています。ネットの中で知り合った方との交流を、どう地域振興へ繋げていくか、そこを常に意識することが大事なんです」。瀧さんはSNSを介して縁を得た他の地域のイベントにも参加。そこで深めた絆や交流が、また新たな人の縁を結び、松江の振興へと繋がっていく。「癒し」をテーマに、古き良き観光財産を生かしたまちづくりが、新しき良きツールに乗って動き出している。

^{*} SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）とは、インターネット上の交流を通して社会的ネットワーク（ソーシャル・ネットワーク）を構築するサービスのことである。代表的なSNSとして、Facebook、Twitter、mixi、Google+、LINE などがある。

松江の雨は縁を運ぶ

取材を終える頃、晴れ女パワーが予報に屈し、雨が降り出した。皆さんにオススメ観光スポットを

聞き、これから回るのを楽しみにしていたのに……「あ〜あ降り出しましたね」溜息をついた記者に、「松江は雨の似合う街なんですよ。“松江の雨は縁を運ぶ”縁^{えにし}とも言われています。むしろ、いい時に来られましたね！」おもてなしの心溢れるその言葉に、弾む気持ちで折り畳み傘を開いた。



街には至るところに
女性の心をくすぐる
ご縁&ご利益
スポット



松江市はこんなまち

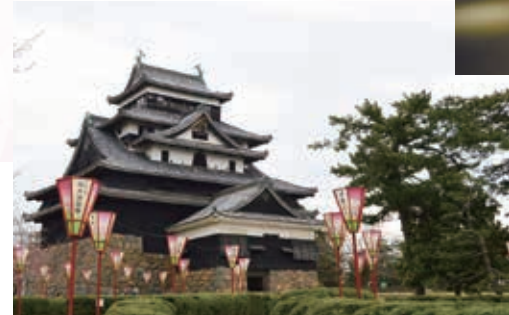
宍道湖の夕日

松江市は山陰のほぼ中央に位置し、面積573.01km²、人口206,123人。古代出雲の遺跡や出雲古事記、出雲風土記などの神話にまつわる神社、史跡をはじめ、松江城天守ほか造成当時の掘割やまち並みを今に残す城下町。時がたつにつれ様々な表情を変える宍道湖の夕景の美しさは「日本夕陽百選」にも選定され「水の都松江」の象徴と言われている。



松江城・松江歴史館

城下町松江のシンボルで、松江開府の祖・堀尾吉晴公が慶長12年（1607）から足掛け5年の歳月をかけて築城。千鳥が羽根を広げたように見える入母屋破風の屋根が見事なことから、別名「千鳥城」とも呼ばれる。山陰地方で唯一現存する天守閣は、黒塗りの下見板で覆われており、その荘重かつ優美な姿は訪れる人々を魅了する。松江城隣の松江歴史館では、城や町の仕組み、移り変わりなどを、資料展示、映像、模型、書割、切り絵ほかの手法で紹介している。



堀川遊覧船

城下町の風情を楽しむ遊覧船は松江観光の目玉のひとつ。堀川を巡る全長3.7km、遊覧時間約55分。船は屋根つきなので、雨や雪の日も利用できる。冬の風物詩コタツ船は、ほかほかと気持ちまで温まると評判だ。



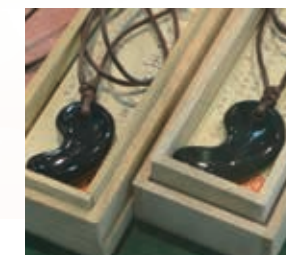
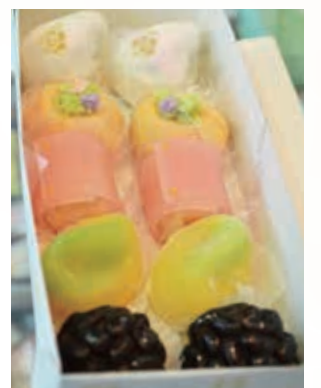
出雲そば

そばの実を甘皮ごと挽く出雲そばは、色が黒っぽく、腰が強いのが特長。代表的な食べ方の「割子そば」は朱塗りの丸い器に、薬味を添え、濃い目のつゆをかけていただく。松江では、地元で実った「玄丹そば」の実を使って作られる。



和菓子

松江は、一流の茶人であった松江藩藩主「松平不昧公」の時代から続く、日本三大菓子処。市内には和菓子作り体験ができる「カラコロ工房」もあり、松江ならではの銘菓はお土産にも喜ばれる。



出雲めのう細工

出雲地方は古来からめのうの産地で、朝廷に献納した歴史もある。玉造特産の青めのうは、勾玉などに加工され、装飾品として珍重されている。

若葉の ふるさと協力隊

四方を山に囲まれ、京都府内でも寒さが厳しく雪深い奥上林地区。ここで今年2月、都市の若者をサポーターに迎えて、手作りの竹行燈を灯すイベント「冬あかり」が開催された。

取材・文：吉岡稚子

2日間で400個の行燈を完成させた



雨のなかスタードームの組み立て作業に取り組む

冬の山里にあかりを灯す

都市農村交流1年生

「田舎暮らしや都市農村交流が人気を集めていることは知っていたが、経験もアイデアもなく、さらに地域住民の大半は高齢者。なかなか新しいことに取り組みずじまり」。そう話すのは、イベントを主催した奥上林地域振興協議会会長の橋本正巳さん。昨年の11月中ごろ、市から「若葉のふるさと協力隊」を活用し、冬のイベントを開催してみないか?と提案を受けた。しかし、初めての取り組みに「どれだけの人が見に来てくれるのか?」など、不安も大きかったという。市の担当者も「急な話ということもあって、最初は困惑した様子だった。しかし、何か行動したいという地元の気持は伝わってきた」と振り返る。市は広報をはじめ全面的な協力を約束。サポーター募集を特定非営利活動法人地球緑化センターが担うことも後押しとなり、協議会は都市農村交流イベントの開催を決めた。

それから3か月足らずで準備を進め、2月12日に5人の協力隊を迎えた。東京や大阪から「里山の暮らしを体験したい」「春休みを使ってボランティアがしたい」「普段接する機会の少ない、年配者と話がしたい」など協力隊は様々な期待を持って参加。翌日から協議会のメンバーとともに竹行燈作りに励んだ。作業内容は、切り揃えられた細竹を輪ゴムで三角錐に組み立て、上にかける紙を裁断し、筒状にするというもの。この単純な作業を繰り返し、丸2日をかけて400個の行燈を制作。同じ作業をするなかで、自然と会話が弾んでいた。

交流イベントがもたらすもの

迎えたイベント当日は、前日から雨が降り続き、時おり強風も吹くという野外イベントには最悪の天候となった。長さ3メートルの竹で組むスタードームの仕上げ作業、「水源の里」をイメージした行燈のレイアウト——予定通り準備は進んだが、天気は一向に回復しない。設置した行燈も強風に

飛ばされてしまう。イベントの開催さえ危ぶまれる状況を考慮し、点灯はやむなくスタードームだけとなった。ここまで準備したのに……スタッフの表情が曇っていく。そんななか、連日、行燈作りに参加していた地元の人々から声があがった。「何日もかけて取り組んできた。途中でやめたくない」「遠くから来て、一緒に準備してくれた協力隊のためにも完成させよう」。再び、全員で行燈の設置と点火に取り組んだ。

しばらくすると、風雨が弱まり、次々と行燈に灯りが。薄暗くなった会場をロウソクの温かみある光が包み込む。「水源の里」の形が浮かび上がると、スタッフの表情も笑顔に一変。訪れた人たちからも感嘆の声が上がる。これまでの苦労が報われた一時だった。数分後、再び強風で大半が消えてしまったが、高揚感はそのままだに「冬あかり」は幕を閉じた。

火が点いた行燈は、予定の約半分。集客や開催時期など様々な課題は残ったが、イベント関係者は「やって良かった」と口を揃えた。高齢者が多い地域では、若者がいるだけで明るくなり、元気になれるという声を聞く。やはり、このイベントでも若者の存在が原動力となった。地元は戸惑いながらも新しい取り組みに挑戦し、さらに来年も再来年も続けていきたいと意欲的だ。一方で、意外なほど軽い気持ちで参加した若者たちだったが、年齢も生活環境も大きく異なる人々との出会いに「今回の体験で人生観が変わった」「地域への愛が伝わってきて感動した」「この縁を大切にしていきたい」と目を輝かせていた。共通の思い出を胸に、新たな取り組みやつながりへと広がっていく。天候に阻まれたものの、地元も若者も思いがけない収穫を得る機会となった。

奇跡的に風雨が弱まり、会場が行燈の温かい灯りに包まれた



イベント後の懇親会。晴れやかな表情が印象的



綾部を発つ日。活動の証「参加証明書」を手にした協力隊

特定非営利活動法人地球緑化センターは、緑のボランティアを育て、その活動を応援する専門団体です。

緑のふるさと協力隊

自分の将来への可能性を見つけようとする若者たちが農山村を舞台に、1年間、地域に密着したさまざまな活動に取り組むプログラム。

若葉のふるさと協力隊

田舎暮らし体験やボランティアをしたい若者を派遣する、2泊3日～4泊5日の短期プログラム。



各プログラムに参加したい方、協力隊の受け入れを希望する自治体は、下記までお問い合わせください。

TEL: 03-3241-6450
FAX: 03-3241-7629

奇祭「すみつけ祭り」と 権現窯の復活

木浦鉦山集落の基礎データ

世帯数…32 世帯、人口…48人 高齢化率…68.75%

活用している事業

- 「大分県里のくらし支援事業」
・集落の維持や活性化につながる、長期的な取り組みを行う団体等に補助金を交付
・人手が足りない場合は、集落の共同作業を手伝う応援隊を派遣

活動のきっかけ

伝統ある集落の祭事の中止をきっかけに、集落を離れて暮らす若者と地元で暮らし続ける高齢者が互いに集落への「郷土愛」を再認識した。

佐伯市はこんなまち

九州最東端に位置し、人口約77,000人、面積903.4km²、海岸線延長270km、九州で一番広い面積をもつ。人々の生活の中に自然があり、海・川・山から受ける多くの恵みを活かした農林水産業が盛ん。

福岡県

大分県

熊本県

宮崎県

佐伯市

木浦鉦山地区の歴史

佐伯市宇目木浦鉦山集落は、国定公園である傾山(標高1,602m)の東側山麓に位置し、九州で最も山深い集落のひとつだ。400年以上前から銀や錫を中心とした鉦石を産出してきたが、錫鉦業整備令や終戦により休山。その後再開し、昭和42年にダイヤモンドに次ぐ硬度があり、研磨材などに利用されるエメリー鉦を産出するも、需要の変化から平成21年に再び休山となった。



「ひとつ祝わせちよくれ」と声を掛け、誰彼構わず炭を塗り合う

奇祭「すみつけ祭り」

この集落がかつての鉦山らしい賑わいを見せる祭事、それが2年に1度開催される「木浦すみつけ祭り」だ。参加者全員が大根に炭を付け、互いの顔に塗り合う。その際、無病息災を祈願して「ひとつ祝わせちよくれ」と言うのが習わし。最後は赤い面姿の荒神が区内全戸を舞いながら厄払いするという、全国的にも珍しい祭りだ。

しかし、平成18年末、地区総会で祭りの中止が決まった。理由は「高齢化」「やりたくない」のではなく、「できない」のだ。これまで、集落を離れて暮らす若者も当日のスタッフとして祭りを支えてきた。中止の決定を憂いた若者数名は、地元のお年寄りに「伝承の使命感」の欠如を詫び、度重なる協議の末、平成22年2月に祭りを復活させた。今では県内外から500人以上の見物人が集まる祭りとなり、いつもは閑静な山村集落も、この日だけは笑い声が山々に木霊する。



お巡りさんも顔中炭だらけ



すみつけの後は、荒神様が区内全戸を回って厄払い

権現窯での炭づくり

年配者も若者に負けてはいない。今から4年前、かつての炭窯を利用した炭づくりを復活しようと、高齢者8人が「権現窯グループ」を結成した。

集落には約70年前からいくつもの炭窯があった。そこで作った炭が重宝されていたが、需要の減少と後継者不足により、いつしか窯の火は消えていた。しかし、若手による「すみつけ祭り」の復活などを期に、集落の高齢者たちの気持ちに変化が生じ、炭づくりが復活した。

権現窯グループのメンバーは、9月から3月の間、週2日炭づくりに励む。1回の火入れで約260kg、2週間以上をかけて炭が完成する。主に「道の駅」で販売しているが、年間の利益は10万円程度だ。

グループの代表者は、「今後は利益を増やし、新たな雇用の場となれば」と期待を胸に今日も炭窯に火を点けている。



約70年ぶりに火入れされた権現窯



薪割り作業も慣れたもの



フレッシュな果実と濃厚なミルク味
2層仕立てのシャーベット

ふたなそるべ

高知県中土佐町 215円

「ふたなそるべ」を製造・販売するのは、地元のイチゴ農家の女性6人が運営する「風工房」。自家栽培イチゴのショートケーキが看板商品のカフェ＆ケーキ店です。鯉のアラを肥料にした甘くて大きなイチゴを目当てに、県内外から多くの人が訪れています。

しかし、今回ご紹介するのは、果物にミルクを合わせた2層仕立てのシャーベット。イチゴのシーズンが終わる夏の主力商品として6年前に開発されました。一番人気はイチゴ味。旬の時期に収穫したイチゴを冷凍保存し、都度シャーベットにすることで、イチゴの甘味と酸味をしっかりと残しています。さらに、ゼラチンを加えることで、シャリシャリではなく、ふわとした口当たりを実現しました。

定番のイチゴ、ブルーベリー、他、生姜や小夏など、高知らしい味が揃うなか、特におすすめしたいのはスモモ味。鮮やかな桃色は、皮ごとピューレ状にしたことで出る自然な色。一口食べると、甘酸っぱく濃厚なスモモの味が広がります。下のミルク味と合わせて食べると、なめらかな味わいに！2度楽しめる美味しさです。



年間を通して人気の
苺シフォンケーキ



中土佐町久礼の景勝地・双名(ふたな)島とフランス語でシャーベットを意味するソルベから「ふたなそるべ」と命名。パッケージもユニーク

写真提供：満天土佐



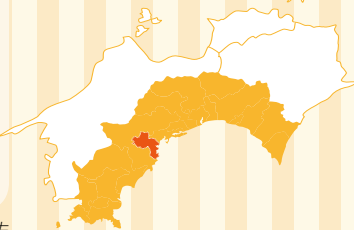
「風工房」久礼(くれ)湾を一望できる2階のカフェでイートインも楽しめる

風工房

住 高知県高岡郡中土佐町 久礼 6782-1
Tel 0889-52-3395
営 10:00-18:00
休 木曜
http://www.kazekoubou.net/index.shtml

イチゴの日にちなみ、毎月15日は全商品5%引きとなる

中土佐町はこんなまち
面積 193.40 km²、人口 7,612 人。
「土佐の一本釣り」で有名な鯉漁をはじめとした漁業がさかん。5月に開催される「かつお祭」には1万7千人の人数があり、2.5トンの鯉が振舞われた。



教えて！おすすめみやげ

定番 鯉めしの素

5袋セット(1袋 180g) 2,980円
炊き立てのご飯に混ぜるだけでできあがり！
山本鮮魚店(大正町市場内)
Tel 0889-52-3373
営 11:00 ~ 17:00 休 不定休 通販可(送料別途)



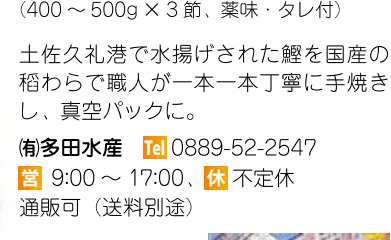
NEW しょうがの恋

(90g) 480円
土佐久礼産の鯉と四万十産の生姜を合わせ、旨みたっぷりのラー油仕立てに。
企画・多久礼もん企業組合
Tel 0889-52-3822
営 12:30 ~ 17:00 休 水曜 通販可(送料別途)



イチオシ わら焼き生鯉たたき

時価 (400~500g × 3筋、薬味・タレ付)
土佐久礼港で水揚げされた鯉を国産の稲わらで職人が一本一本丁寧に焼き、真空パックに。
南多田水産 Tel 0889-52-2547
営 9:00 ~ 17:00、休 不定休 通販可(送料別途)



私のイチオシ！ 中土佐町観光物産センター 守屋さん
鮮度にこだわり、味にこだわった本格わら焼きたたきです。タレや塩、ご飯に乗せてたたき丼にしても美味しいですよ！

取材協力 中土佐町観光物産センター
Tel 0889-52-4400 営 9:00 ~ 17:00 休 木曜



協議会だより

インフォメーション 第6回 全国水源の里フォトコンテスト作品募集

テーマ

水源の里の四季折々の自然風景、人々の生活や祭事、その地域を象徴する風物など、水源の里の魅力が表現された作品を募集します。

応募資格

プロ・アマ、年齢、性別、国籍を問いません。

撮影場所等

平成23年8月以降に、全国水源の里連絡協議会参画市町村において撮影したもの。



受付及び締切

平成26年6月1日から7月31日まで。最終日消印有効。

応募料 1点につき1,000円

賞

グランプリ(1人) ……賞金 20万円
国土交通大臣賞(1人) ……賞金 5万円
総務大臣賞(1人) ……賞金 5万円
農林水産大臣賞(1人) ……賞金 5万円
特選(10人) ……賞金 1万円

審査員

ゲスト審査員 鷺田清一(大谷大学文学部教授・哲学者)
特別審査員 田沼武能(日本写真家協会会長)
審査委員長 井上隆雄(日本写真家協会会員)

応募・お問合わせ先

全国水源の里連絡協議会 フォトコンテスト事務局
〒623-1122 京都府綾部市八津合町上荒木5番地
上林いきいきセンター内
TEL: 0773-54-0095 FAX: 0773-54-0096
E-mail: suigen@city.ayabe.lg.jp

読者プレゼント

ふたなそるべ
イチゴほか6個セット 2名様



アンケート

- Q1. 面白かった・関心を持った記事
- Q2. 今後取り上げてほしい内容
- Q3. 水源の里への思いや本誌に関するご意見・ご感想

プレゼント応募方法

はがきにアンケートの回答と住所、氏名、電話番号、性別を明記の上、下記宛先『水の源25号』読者プレゼント係までご応募ください。

【平成26年7月11日(金)消印有効】

※当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。
※ご応募いただいた皆様の個人情報は、賞品発送以外の目的では使用しません。

編集後記

■ インタビュー／町井

新山陽子先生が京都府綾部市のNPO法人里山ねっと・あやべ理事長にご就任以来、ご一緒させていただいております。肩のこらない楽しいインタビューでした。静かな語り口の節々に強い意志を滲ませ、特に子どものころの情景をお話されるときの生き生きとした様子が印象的でした。

■ ウォークルポ／白波瀬

「私たち若い世代が、松江のいいところ、を胸を張ってPRできるようにならなければ！」青年会議の河野さんの言葉が印象的でした。「市街を一望するなら、千手院へ」「出雲そばは食べました？発祥は、出雲じゃなくて松江、なんですから」「銘菓を買うなら歴史館内の『きはる』に和菓子の名工がいますよ」……この意識が松江の地域振興の原動力。「私は故郷のいいところを幾つあげられるだろうか？」改めて考えさせられました。

本誌に関する
お問い合わせ、
ご連絡先は

▲全国水源の里連絡協議会 水の源編集委員会

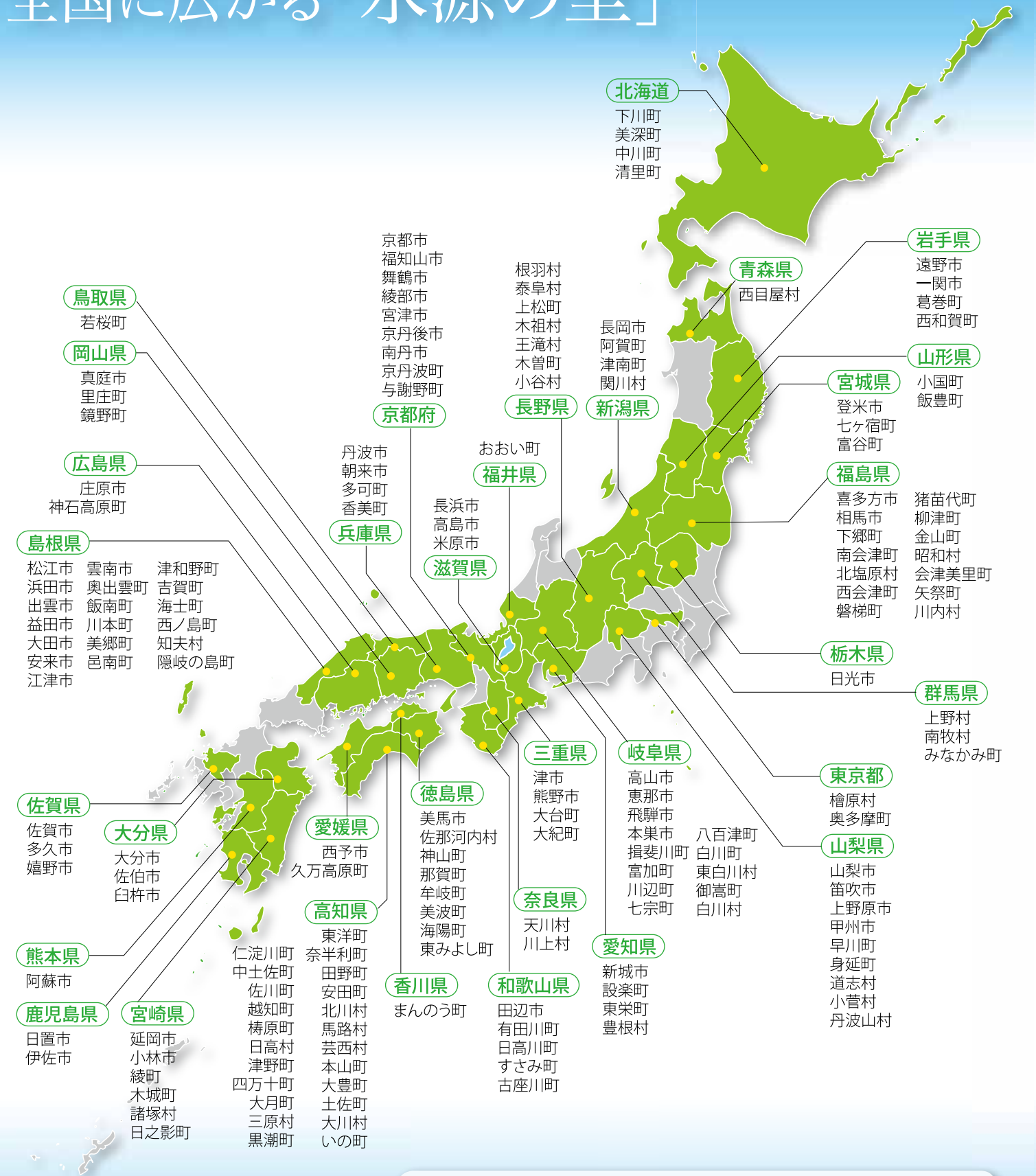
綾部市役所 定住交流部 水源の里・地域振興課 〒623-8501 京都府綾部市若竹町8番地の1
TEL: 0773-42-3280 (代表) FAX: 0773-54-0096 E-mail: suigen@city.ayabe.lg.jp
http://www.suigenosato.com/index.htm

定期購読のお知らせ

『水の源』が年4回お手元に届きます。年間購読料:1,000円(送料込)
お申し込みは、上記の電話、ファックス、メール、HPから

上流は下流を思い、下流は上流に感謝する

全国に広がる「水源の里」



水の源 第25号

企画・発行：▲全国水源の里連絡協議会

発行日：平成26年6月

編集：「水の源」編集委員会

私たちは水源の里を応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会
 一般社団法人 全国浄化槽団体連合会
 全国森林組合連合会
 一般社団法人 全国清涼飲料工業会

全国農業協同組合連合会
 電気事業連合会
 独立行政法人 水資源機構
 公益社団法人 大分県薬剤師会